

時代の転換のただ中で、「五〇年」を振り返る

六〇年安保ブント結成五〇周年記念集会への呼びかけ

八木健彦
Yagi Takehiko

時代の大きな転換期が訪れている。サブプライム破綻、リーマン破綻から端を発した世界金融危機、そしてそれとともに一挙に露呈した実体経済の弱体化と世界的な不況期の到来は、再び三度激動の時代の到来を予感させている。それはこの二〇年以上にわたって世界を席捲してきた他国籍企業と金融権力の新自由主義グローバルゼーションの行き詰まり、破綻であると同時に、戦後世界と社会を根底から揺さぶらずにはおかない。

揺らぎつつある。そして各国も社会的格差・断裂の深まり、非正規労働・移民労働の形態での野蛮な搾取と貧困の拡大、医療・教育・住宅等社会的基盤の綻びと軋み等々、「福祉社会」が「弱肉強食社会」へと変貌してきたその閉塞と軋みに喘ぎ、揺らいでいる。この時代の転換は、前世紀八九年の旧ソ連・東欧の崩壊よりより広く、深い、根底的なものとなるだろう。

そうして今、民衆は「変化」「変革」を時代の課題へと押し上げていく。その潮は、既にラテンアメリカ諸国の民衆運動の高まり等にくつきりと刻まれており、アメリカ大統領選におけるオバマの「Change＝変革」の呼

びかけは、民衆の「変革」への欲求を草の根から突き動かし、「変化」への手探りを敏感に反映するものであった。この「変革」を求め、「変化」を志向するうねりは世界的な潮となっていくであろう。だが、この「変革」はどのようなものなのか。またどこに向かつていくのか。真の希望はどこにあるのか。それが時代の問いであろう。

今の、時代の大きな転換の中で、ブント結成を記念し、六〇年安保世代の人達に歴史を振り返って頂きたいと思う。若き日の思いと情熱を、懐旧のなかに、過去の輝く歴史として共有したいと熱望しているのは私たちだけではないだろう。その中から何を学び、何をくみとるかは、参加する個人に帰属する。そのことを含めて、その後の五〇年を振り返り、そこからどれだけかの継承すべき経験と教訓を引き出し得れば、今を生きる私た

ちにとつてのどれだけの糧とすることができよう。

この新しい時代の大きな転換期の中で、ブント五〇周年記念集会への参加を呼びかけます。

【日時】
二月二日(日)
一三時～一七時(二時半開場)

【場所】
文京区民センター2A(地下鉄春日駅)

【呼びかけ人】
大下敦史、八木健彦、新開純也、長崎浩、蔵田計成、前田裕晴、石井映禎、佐藤浩一、西村卓司、川音勉、横渡 ほか

「情況」12月号(二〇〇八年)

ブント結成五〇周年記念集会

二〇〇八年一月二日

香村正雄・加藤尚武・宮脇則夫・佐藤浩一・西村卓司・前田裕晴 司会 蔵田計成

蔵田●六〇年安保闘争以来、私達が深い挫折を経て、半世紀がたったわけですが、半世紀ぶりに、若い世代の諸君及び七〇年安保全共闘世代の諸君、六〇年安保・ブント結成、その時代を担った全ての世代が一堂に会して、今日の集会を持てたことは、画期的なことだと思います。その意味で、この集会は非常に意義があったんだろうと思います。

冷戦崩壊から約二〇年、〇八年には、サブプライム・ローン崩壊に端を発した、世界の金融不況の大波が、ひたひたと世界を駆けめぐり、押し寄せています。そういった時代の中で、私達が、本日の集会を持つという事は、ほんのささやかな歴史の一コマに過ぎないとはいえ、参加者一人ひとりにとっては、歴史としての意義をもっていると思えます。

ひとつだけ、注釈があります。本日の集会は、必ずしも、

一つの目的、一つの方向、一つの政治的思想を持ったものではありません。今日の発言者も、それぞれの立場から、それぞれの思いを込めて一つの歴史を語っていただくことにしています。私達は歩んだ道こそちがえ六〇年安保世代の人間として、過去のひとつの歴史に対する共有感、感動、熱い思いを胸に秘めている点では同じです。次世代への歴史の教訓として語り継ぎたいと思っています。おそらく、その意味でこの集会に参加していらっしゃる皆さん方とも、ひとつの接点を共有できるものと確信しています。過分ながら、各自各様の論理、思想、立場から、発言内容の意味、過去の歴史の教訓、意義を引き出していただければと、心から念じています。どうか、是非とも明日の実践の糧にして下さい。

ちょっと余談になりますが、今日のこの六〇年安保創成の五〇周年に当たって、私達の集会よりも少し前に、二つの集

会が持たれたので、それを若干ご報告しておきます。一つは、六〇年安保全学連・ブント・社学同OB・OG諸君が参集しました。青木昌彦（姫岡玲治）出版記念会のあと、それこそ、顔と名前が一致するような親しい「身内」が集まって、まさに同窓会というにふさわしい「送別会」を持ち、全員が、己を語ることができました（笑）。まあ半ば年齢を考えると、人生との送別の意味があるのかもしれない。

そこには若干のいきさつがあります。私達は、本日の六〇年安保ブント結成五〇周年記念集會を、今日の二一日じゃなくて「一二月一〇日」という、歴史にふさわしいその日を予定していたのです。ところが、今日のこの結成記念集會を準備する過程で、友人篠原浩一郎君に話を持ちかけたら、彼氏いわく「そういえば、五〇周年だよな。それじゃ、俺たちも同窓会か飲み会でもやろうしようじゃないか。できれば、ブント創成一二月一〇日にもやりたいな」というわけで、青木出版記念会のあと、二次会として同窓会をもったわけでした。結局、一二月一〇日の当日の同窓会には五〇名ちかくが参加。昼間から酒を飲んで、三次会まで、積もる話で旧交を温めることになりました。

それから、もう一つ、昨日は早稲田大学ブント・社学同ブラスアルファー約四〇名ぐらゐの諸君が、早大ブント細胞の分裂以来、初めて集まりました。いまは、多くが生き急ぐ心境です。先が短いし、今年が最後じゃないかという思いを込

め、こちらでも、人生の送別会をやりました。ガンを宣告されて、もはや手の施しようのないという人たちまで含めて参加したのでした。

そういうわけで、この今日のブント結成記念集會は三つ目になります。今日の集會発言者や、先の二つの同窓会出席者をふくめて、延べ三けた近い六〇年安保世代の方々に発言をお願いし、快諾していただいた方々が、今日の発言者です。もちろん、半世紀を生きてきたのですから、それぞれの立場があり、それぞれの生き様があります。今日は、それぞれの思いを自由に語っていただくだけで十分と思っています。己が自身の「本物の遺言」は、各自きちんと遺しておいていただくとして、今日は、そのプロログであり、ほんの一派ージに過ぎないと思います。発言者の皆様には、どうぞよろしく。あらためて、ご発言、感謝したいと思います。

黙禱。

六〇年安保闘争を闘った仲間の中で、六〇年安を闘って倒れた象徴的な故人がいます。ここに遺影を掲げておきましたけど、故樺美智子さんです。さらに、その歴史と共に生きた人物で、いまは亡きブント島成郎、生田浩二、富岡倍雄、陶山健一、全学連唐牛健太郎、志水速雄、鬼塚雄丞、星野中、その他の故人もいます。この他に、革共同系でいえば、太田竜、西京司、全国委を結成した七名のうち黒田寛一、本多延嘉ら四名が亡くなり、一名はガンと闘病中（編集部註・

一〇年没）です。また、全学連反主流派黒羽純久、林弘も他界しました。それに『内ゲバで倒れた人々』というタイトルの資料（二〇〇七年作成、宮冬彦）がここにありません。実に克明に書いてあります。こういう方々も含めて、私たちは、まず、この集會の冒頭に、革命運動のなかで倒れた人達に哀悼の意を表したいと思えます。ただいまから、一分間の黙禱を提案したいと思います。皆さん、ご起立をお願いします（黙禱開始、黙禱終了）。

香村正雄

蔵田●香村さんは一九五四年東大の文一入学。東大教養学部新聞部入部。東大新聞入部。全日本学生新聞連盟の書記長をやっています。それから、五六年には、アジア・アフリカ学生大会に全学新代表として出席。同じ年の国際学連の世界大会にも出席していらっしやいます。この間、日中国交回復以前の中国・北朝鮮とソ連を訪問しています。ブント創立の時に、リベラシオン社を作りました。創成当時のブントにとつて、全国政治新聞の編集・印刷・配布という作業は、「批判の武器」として最大の手段でした。ムスケル（手作業）をふくめて、この懸案事項を率先し見事に遂行された香村さんは、われわれの記憶のなかでは、歴史に残っている人です。香村●香村と申します。知る人ぞ知る。だいたい知られていないです。こういう雑誌をご覧になったことありますか。復

刻版もあります。この活字のところ、リベラシオン社、東京都練馬区豊玉北五丁目八番地の一とありますが、これは私の家です。ここで私は昭和一〇年に生まれました。実は、高校時代から左翼は左翼だったので、心情左翼で、生田浩二みたいに高校の時から共産党細胞静岡高校を作って活動するというような政治的なことはあまりやらなかったわけですよ。例えば、東大に入った時、香山健一のつる頭、いわゆるスキンヘッドの香山を見て、変な共産党がいるなと思いつつながらピラを受け取っていたように、逆に、当時の共産党の活動、共産主義運動を白い眼で見ている方に属していました。

今盛んに田母神俊雄さんが中国へ侵略したことがないと言っておられますが、実は、うちの親父は、練馬を離れまして侵略の先兵として中国に行き現地交渉もしましたけれども、メリケン粉会社の工場長として、そこで終戦を迎えたわけです。

ある時、私どもの家に蒋介石の軍隊がやって来まして、「お前たちを守ってやる」と言つて、我が家に住み込みました。どういふことかと言いますと、当時、パロジと言った人民解放軍（第八路軍）が、天津の郊外、北京の郊外もおさえておりました。この第八路軍の脅威から日本人を守るといふのが、蒋介石の軍隊の言い分でした。

その後、北京も天津も人民解放軍が無血開城しました。ド

ンパチやららないで占拠されちゃいました。共産党から言う
と、解放したわけです。そのことを引き揚げてきてから知り
ました。この共産党の力、その歴史を変ええる力というのは、
どういふ処から出ているのか、これが私の今もってのテーマ
です。それを知るためには、現場を見なきゃならないという
ことで、先ほどご紹介にありましたように、アジア・アフリ
カ会議の学生版としてバンドンで開かれたアジア・アフリカ
学生会議に、全学新代表として潜り込みました。それは、格
好良く言えば、ジャーナリスト的な関心ですが、中国、ソ連
を見たいというほとんど個人的な興味・関心が主体でした。
それで、共産党全学連中執の桜田君と一緒に、その前に一カ
月かけて共産党が私の身元を調べ上げ、それでやつとジャ
カルタの中国大使館でビザを貰い、やつと香港（深圳）経由
で、とことと歩いて、広東に入ったわけです。当時は、も
ちろん国交回復前でしたが、中国各地の大学をまわり、非常
に革命の熱気が盛んな中国人の若者の姿に、感動しました。
そして国際列車で、一週間かけて、ピョンヤンからモスク
ワに入り、モスクワからブライトンに行って、国際学生大会に
参加したわけです。ここで、私が一番印象に残ったのは、
その壇上で、ロシアの学生と中国の学生が殴り合いを始めた
ことです。これが、その後続くハンガリー動乱の契機にな
る中ソ共産党の対立でした。それで、初めて私は戦前一枚岩
だと言われていた共産党もずいぶんやるなという印象を持ち

私は、ブントの自治会運動をやりませんでしたし、それか
ら、党の組織活動にも参加しなかったために、今言いました
ように、だいたい知られていないという状況ですが、共産主
義運動というのが、私の関心の中心でしたので、世界的にど
ういふふうに行われているのか、それから、党派闘争が
どういふふうに行われているのかということが関心の主題で
した。そういう意味においては、皆さんのお話とかなりかけ
離れています。当時はちんぷんかんぷんだったのですが、マ
ルクス経済学を勉強しました。特に国際経済論がメインで、
恐慌の問題もずっと勉強しております。まさに、これから、
世界プロレタリアートと言われる、労働者階級ではない、も
ちろん労働者階級も含みますが、中産階級の没落者、農民の
はみだし者、都市のいろいろな貧困者、これが一大潮流と
なって、当然、革命が起きます。これは、今まで、前衛党が
想定しなかった、先ほどもちょっと長崎浩さん、石井さんが
言及されましたが、そういうかたちでプロレタリアートの反
乱が起きます。皆様方が、前衛党論の総括をふまえて、自己
の役割をにやっていただいたいと思っております。

私のもう一つの課題は、アメリカ政府が自動車会社を救済
するというような社会主義的な方向、それから、鄧小平のよ
うに権力奪取をした後に資本主義を導入するというのは、
たんに修正主義というようなことでは片づけられません。わ
れわれが、『共産党宣言』に類するマニフェストを、具体的

ました。

帰国して、何かやらなきゃいけないと感じ、社学同などに
出入りしました。そしてブントの創設に加わるわけです。先
ほど紹介がありましたように、私も共産党に入れたということ
をさんざん言われましたが、いやだと言っていました。とこ
ろが、生田が東大細胞の中でもかなりの策士で、先ほどの医
学連の石井暎禧さんの話にもありましたように、共産党に大
量に入会して、分派闘争をやるのが彼の目標で、私が入党申
込書を書かないのに、黨員の中に入れてしまいました。それ
から、共産党本部、共産党の連中、とくに『赤旗』の新聞社
の奴らと殴り合いをやったんです。その中に私も入っていた
んです。さつそく、次の日の『赤旗』で、東大の細胞を全部
除名するという発表の中に私の名前も入っていましたので、
私は瞬間的に共産黨員でした。その後、ご承知のように、
『戦旗』という新聞をつくり、自分で活字を拾いました。新
聞社を作って、ブントの機関紙を作り、それから自分の会社
を起ち上げて、『共産主義』を創刊し、それから、あまり見
映えはよくないんですが、社学同の『理論戦線』も、私が編
集して作りました。それで、知る人ぞ知ることになる
だろうということです。あまり評価してくれませんが、前社
学同委員長中村光男にいたっては、私が『理論戦線』をずつ
とやっていたことを忘れていまして、あんな奴は東大生じゃ
ないと、この間言われました。そういう事情です。

な綱領としてあげるときに、ブントの綱領の原案にある、
一、全ての重要産業の国有化と労働者管理、二、金融機関の
全面的国有化と労働者管理、三、貿易の全面的国有、労働者
管理、という具体的なマニフェスト、要するに具体的
な政策提案というのがはたして可能なのか、どうかという問
題です。もっと言いますと、権力奪取はそれほど難しくな
いというのがブントを通じて私が到達した考え方ですが、そ
の後、労働者が、一般的に資本主義的な経済組織、そして世界
経済を、どうやってコントロールし管理するかが、一つの綱
領に向けての一大課題ではないかと思っております。

加藤尚武

蔵田●加藤さんは、一九三七年生まれ。一九五八年、東大文
学部入学。六〇年安保では都学連執行委員であり、東大駒場
ブントの細胞LC（指導部）として、河宮信郎、坂野潤治、
西部邁君達とともに、日共系全学連反主流派との厳しいヘゲ
モニー争奪戦の最先端で活動しました。ブント最後の第五
回大会（六〇年七月）のときは「巣鴨拘留所」の住人でした。
六・一五事件の被告二三人のひとりでした。機関誌「二四人」
（二四人目は君だ）を発行し、ブント解体という困難な裁判闘
争維持を経験しています。加藤さんは、ヘーゲル研究や環境
論の分野で業績をのこし、著作は三〇数冊を超えています。
新しいヘーゲル論（哲学の歴史）（中央公論社）所収）がいま注

目されています。どうやら、日々の時間との格闘を強いられ
ているのは、昨年、鳥取環境大学学長を定年退職したあと、
というのが現況のようです。

加藤●蔵田さんみたいに昔のことを一月ごとにすっかり覚え
ている人にはほんとにびっくりしてしまいます。入党カード
を二枚書いて出したという人が先ほどありましたけども、私
は二枚書いたのでもなく一枚書いたんです。それを自分で全然
覚えていなかったんですけども、共産党の活動をやってた
吉良さんという人が調べたら、加藤は共産党に入党届けを出
していないから、お前を呼び出して査問にかけるわけには
いかないということで、にやにや笑っていたのを記憶しま
す。二枚組ではなく一枚組の最初の方だったのではないか
と思います。

そして、安保が終わった後、六・一五事件の裁判がありま
したので、弁護士さんと相談したり、お金集めてくれる人が
いたり、助けてくれる人がいたので、その連絡係りなどを
やっていたら、大学院の修士課程の真ん中ぐらいになって
しまいました。それで、有罪の判決を受けたが執行猶予でし
た。それから大学院にいたんです。伴野潤治も一緒でした。

やがて彼と二人で一緒に東大の助手にならないかという話
になり、さっそく、私の主任教授に相談し「ぼく、むかし被
告だったんですが……」というところ、主任教授は「かまいませ
んよ、かまいませんよ、悪い法律もありますし、いい法律も

の『自然哲学』を異様に熱心に読んでという形跡がありま
す。そういうこともわからないと『資本論』の論争だとかな
んとかといつてもはじまらないじゃないかということですよ。
マルクスはヘーゲルを隠して引用しています。その隠された
下敷部分のヘーゲルが、どこに隠れてるかを全部わかるよう
にする必要があるの、ヘーゲル研究をやっていたんです。
最初は、ヘーゲルを全部読めばマルクスはわかるだろうくら
いに思っていたんですが、どうもとてもそんなしろものでは
ないということがわかりました。

ヘーゲルという人は、いろんな言葉をあっちこちで違っ
て使っていますが、要するに、頭の中にあるのは論理じゃなく
てイメージみたいなもんなんです。それを、その都度その都
度、少しずつ少しずつ違った言葉で表現して、そんなにか
厳密な意味での一貫性がないのではないかと、そんなにか
りました。それから、『精神現象学』という書物は、ヘーゲ
ルが風呂敷包みに原稿を抱えて逃げまわりながら書いたため
に、乱暴な書きぶりだということを言われているんです。丹
念に書いたと言われている『論理学』も、じつは丹念ではな
くて、書き直した前の原稿と後の原稿を調べてみると、ど
うしてこういう書き直しをしたのかわからない点が非常に多
いんです。最近出した中央公論の『哲学の歴史』という本
中で、ヘーゲルについて書いたんですけども、そこで、私
は、ヘーゲルという人は、ものすごく面白い思想的なモチー

あります」というわけでした。内心では、安堵するというよ
りも「かなり加減なんだな」と思いました。坂野の主任教授
の方は「じゃあ本当に助手になれるかどうか調べてみます」と
ひどくきまじめなことを言ったそうです。さらに、弁護士
さんのところへ行ったら、「執行猶予期間が切れるから、法
の刑の言い渡しの効力がなくなってるので大丈夫だ」という
ことになり、大学に残って助手になったんです。その前に、
中村光男という男が、私のところへ、哲学書を持ってやって
まいりまして、俺はもうこれから哲学を止めるから、お前に
この本を譲ると言ってくれました。じつはその時はタダでも
らうつもりでいたのです。ところが、後で金よこせと言
うんで、金を払いました。カントの『純粹理性批判』など、基
本的な哲学書を手に入れることになりました。中村光男は、
それ以後、文化人類学の方に進み、私は東大の哲学の方に進
みました。

気にかかっていたことは、マルクスの文章というのも、そ
うとう難しいですけども、もっと難しいのはヘーゲルです。
本当のこと言うと、私自身がヘーゲルさえまだわかってない
んです。『資本論』のなかには、マルクスが、ヘーゲルの言
葉を下敷きにして書いたせりふがいっぱいあって、しかもそ
れが『法哲学』だとか『歴史哲学』なんかを下敷きにしてる
んじゃないかと、ほとんど読まない『自然哲学』を下敷きに
しているんです。マルクスの読書歴を見みると、ヘーゲル

フをいっぱい作って持ち込んだんだけど、そのどれ一つと
して完成しなかった男だということを書きました。それで、
ヘーゲル学会から除名されるんじゃないかと思ったんですけども、昨日のヘーゲル学会で、前は理事長をやっていたんです
けども、また理事に再選されましたが、辞職、就任拒否をし
ました。べつに抗議のために拒否したわけではなくて、もう
年を取っていますから、若手に譲るという意味で拒否したん
です。

マルクス主義とヘーゲルとの関わりというものを学者レベ
ルで見ていると、どこまで遡って考えていったらいいか、き
りがないみたいな気がします。

ある時、そこにいる岩田昌征さんも一緒だったと思うんで
すけれども、ロシア人のツイフトという人に会ったら、もう
マルクス主義はまっぴらだと言っています。何がまっぴらだ
て言ったら、なにかもがまっぴらだと言っています。そんな
こといったって、ゼロから再スタートするなんてできな
いだろうと言ったら、その人は、福音書の精神とカントの精
神でロシアの社会を再建したいと言いました。彼は、根っこ
を掘り下げると言うんですが、木の根っこを掘り下げるくら
いじゃなくて、地面のもうちょっと底の方から掘り下げるみ
たいな話をするので、ゴルバチョフの周辺あたりで起き
た思想的な動揺や変化というものは、ある意味で感情的でも
あったんだらうけれども、根の深いものではないかというふ

うに思いました。

ソ連でゴルバチョフが共産党を解体すると宣言を出した時には、私は中国にいました。私を招待してくれて、食事などの世話係の人達が一斉にいなくなりました。私は、宿舎にいても、なんにもすることがないし、誰も来ないし、どうしようもありませんでした。仕方がないから、大学へのこのこと出かけて行って、知ってる人を探したんです。そしたら、みんな一斉に会議を開いていて、全然出てこないんです。だいたってから「ソ連で共産党がなくなる」という話になったので、急遽、あらゆるところで会議を開いて、中国は解党しないという確認をした」という話を聞かされました。この時には、中国の哲学者の人たちに、ずいぶんたくさん会いました。一人一人、あなたは何を研究していますかと訊いたら、二人目によつと毛沢東の研究やっていますという人に出会いました。中国とソ連とで、党の問題というものを思想的に受け止める受け止め方が大変違っているということを感じ取ったわけです。

これから先、もし、マルクス主義の再建という事態があったとしても、少なくとも、ヘーゲルとマルクスのつながりを回復させるころみはできないのではないかと思います。歴史上、もういっぺん繰り返せと言われても繰り返すことのできないようなものです。そして、ヘーゲルという人をいろいろと掘り下げてみると、非常に不思議な人で、ドイツ人はだ

いたもうイギリス人の言うことは聞かなくてもいいと思っ
ていたなかで、アダム・スミスの本を読んだりして、非常に
社会性というものに目覚めます。その社会性というものを、
ある哲学的な缶詰の中に封じ込めておいたのを、こじ開け
たのが、これまたマルクスです。両者はこのような関係なの
で、その関係をもういっぺん再編しろといわれても、そうい
う具合にはいかないのではないかと思います。だから、もう
いっぺんなんとかしましょうという時には、もういっぺんは
無理だという話をしようと思っています。

宮脇則夫

蔵田●宮脇さんは、一九五八年に早稲田大学第二文学部西哲
系社会学科に入学、自治会副委員長に選任されます。五九年
都学連執行委員に選出、そのときの委員長が糠谷秀剛君、副
委員長が西部邁君と蔵田計成、書記長永見堯であります。直
後早稲田大学全学協議会議長、ブント加盟、日米安保改正
阻止早大共闘の議長に就任、当時の学生運動を指導しまし
た。従いまして一九五九年の二・二七国会突入闘争、樺美
智子さんを失った山場の六・一五闘争と第一次ブントの四大
闘争の二つに関わり、被告になっています。その後法廷闘争
を経て現在は埼玉に在任、福祉教育事業や市議員を歴任し
て地方自治に関係しています。今日はあの安保闘争をどう語
るか聞いてみましょう。

宮脇●ご紹介頂きありがとうございます。ブント五〇年を語
る日に、ご紹介のストーリーを聞いていますとそれほど力も
ないのに、よくあれだけの行動が出来たものだと思つて褒め
てやりたい気もしますが、経過した時間が経緯を纏めてく
れ、若き日を寓話化したようで、忸怩たる思いもいたします
が、当時を語りこれからの縁になることもあるとすれば、自
分のささやかな体験を通して安保闘争を再現してみたいと思
います。

私は早稲田大学第二文学部の学生として安保闘争に遭遇し
たのですが、司会をしている蔵田計成さんとは、ほぼ学年が
重なっており、安保闘争とブントの過程を見て来た者として
の経験を共有しているのであります。早大文学部の自治会室
は、蔵田さんが学生理事（全国大学生協常務理事）をしていた
生協の役員室と隣り合わせにあり、われわれの自治会活動を
彼はじつといつも観察していたような記憶があります。その
ころ彼は勤評警職法闘争で無期停学になり学生運動に距離を
おいていたのですが、第二文学部自治会が早稲田の反代々木
ブントの拠点になるにつれ、ブントに入れ、トロツキーのロ
シア革命史を読めとか、私たちはわが陣営に勧誘した思い出
があります。

私たちの闘争は、第一文学部・第二文学部の自治会室から
始まりました。先ほど東大の関係者が話されたように、五七
年、五八年、五九年と反安保ブントができる前夜、長崎さん

や石井さんの話にも出てきましたが、ブントのオルグが早稲
田にも入り、世界革命の挫折論が伝えられ驚かされました。
そして私たちの間でも初期マルクスの研究やロシア革命史の
学習会が始まり、スターリニズム批判に感銘を受け自分の知
見としたのです。特に山口一理さんのロシア革命批判などの
著作にふれて、こんな歴史観があるのかと目から鱗が落ちる
体験をしました。早稲田にも露文科の中に力のある活動家た
ちが居り、ドストエフスキーの文学作品の読解を教えられ、
一九一七年のロシア革命に浸る気持ちになりました。私たち
のこのような気分の変化が、間違つた前衛党を倒し真の前衛
党を作れば、この国の政治を変革できるかもしれないと考え
られるようになったのです。あのころ早大第二文学部学生は
二〇〇名ぐらいいたと思いますが、半分ぐらいが昼間働く
夜学生であり、プロレタリアートという言葉に酔うように、
勤評警職法改正反対運動や学費値上げ反対の学園闘争を繰り
広げブントがリードする反安保の学生運動を呼び起こし、早
稲田から日比谷まで都電を二〇台、三〇台連ねて終結する中
央集会を成功させることになるのです。五九年から六〇年の
闘争集会前夜、私たちは法学部地下教室に集合して、集会の
スローガンを記入した横断幕や集会の縦看作りを行い、大量
のピラ作りをしたものです。こうして早稲田大学の全学闘争
は、次第に盛り上がる準備が整っていき、やがて大学の壁を
越え、学外の労働者市民の間にも反安保の機運が伝わるよう

に広がっていききました。

かくして早稲田でも反代々木派が中心となる学生運動が形成され、新左翼の主導権の下、各学部自治会の執行部を転覆、第一文学部や第一政経学部でも新パワーに影響される学生集会が見られるようになりました。このような情勢の変化を見るのは、裏に一九五八年二月一〇日、新しい前衛政党を目指す共産主義者同盟（ブント）の結成があり、その指導がじわりと始まり、活動的な学生たちによって、その政治的影響が伝えられたからであります。

早稲田大学は、学生の数は多いけれども革命的理論戦線、あるいは学生運動の中で指導的役割をどれくらい果たしたかといえ、眉唾物であります。大衆闘争の主導権争いの主戦場としての役割を果たし、公認の前衛政党を放逐し次第に一般学生を巻き込み、市民運動に広がる契機を作り出せたのは確かな功績でしょう。ブントに指導された早稲田の指導者たちは、まず第二文学部自治会を掌握、ブントの拠点をつくり学生運動を指導、全国学生自治会総連合の旗印を掲げて、国民運動に影響力を与えようとしたのです。一九五九年に入り岸内閣は、日米安保条約改正に政治生命を賭け、国会で強行採決、強行突破も辞さぬ構えを見せましたので、半年もたたぬうちに既成左翼も加わり安保改正阻止国民共闘会議なども登場して安保闘争は国民的課題になりました。

そのころの早稲田の第二文学部は、いよいよ強くブントの正阻止国民会議は何の対応策もなく、わがブントも次の方針を打ち出すことが出来なかったのです。そのような中で大衆闘争に高揚した市民社会は、堪り兼ねる挫折感に見舞われるわけです。

一九六〇年六月二三日、樺美智子の国民葬を日比谷公会堂で済ませた後のことですが、都学連は六月末文京区役所二階で大会を開き、安保闘争を総括冷静な判断を取り戻し、学生運動を立て直そうとした日のことです。その最中会議に必要なポールペンとノートを仕込みに会場の文京区公会堂を出て、大通りを越えて文房具屋を探しに出たときのことです。数人の警視庁のデカさんたちが私を取り囲み逮捕しようとするのです。都学連大会を張っていたのですね。しかし私は若く逮捕されたまるものかと足を使って都電沿いに駆け出したのです。そうしたらデカたちが金魚の糞のようについて来て、捕まえてくれと大声で叫ぶのです。近くを走行していたトラックの運転手などが怪訝に思い接近してきたので、『俺は全学連だ』と手を上げたら、そうか頑張って逃げると声をかけてくれました。当時の私は革命闘争というものを理解していたとは思いませんが、大きな国民的課題の政治闘争が燃え上がれば市民の中の機運も高揚して、都内の随所に学生リーダーを守ろうとする雰囲気も形成されてくるものであることを理解しました。ブントが崩壊して分裂、第一次ブントを総括する党派闘争が始まろうとしていたころのことです。

影響を受け既成左翼を粉砕、新しい時代が始まったのではないかと意気込むような気持で行動したことを覚えていきます。一年生の私が自治会の副委員長になり、都学連の執行委員になれと言われて、都内の大学自治会の仲間たちを知るようになりました。当時出席した全学連大会の塩川委員、香山委員長、唐牛委員など火の出るような演説を聴かされ、歴史的な学生運動が始まるという呼びかけが時代の趨勢であると信じました。早稲田に入った島成郎、生田浩二、青木昌彦、清水丈夫さんたちの指導が進むにつれ、私は安保条約早稲田大学全学協議会議議長を引き受けて、毎日大隈銅像の前に立つ学生生活が続きました。

ここで私は一九六〇年代の安保闘争が、市民の間にも浸透して支持されていたかを示す一つのエピソードをお話して大衆社会の高揚した状況を語りたいと思います。今日は文京区へ来て皆様にご挨拶しているわけですが、会場の近くであった出来事を忘れることができません。それは安保条約の強行採決に対して、六・一五闘争で対応、つづいて自然成立に抗議して徹夜の六・一八国会包囲デモを敢行したが、岸首相の自衛隊投入の恫喝に対して、ブントも対応策を打ち出せず安保阻止国民会議と共に自重、安保改正成立を見送ったのですが、それが安保闘争の終焉を迎えるものでした。確かに岸内閣は打倒されたのですが、国政の課題を国民生活に切り替えて、経済的豊かさを呼びかける池田内閣を登場させ、安保改

たが、理論なき前衛運動は、方針を見失って学生労働者の改革運動を低迷させるのです。一九六〇年の安保闘争は、ブントを失って平連の反戦闘争に熱気を引き継いでいったのであろうが、社会民主主義者の中からも指導的理論は生まれず、冷戦体制が崩壊するまで、米国の安保体制は不動のまま維持され、保守的自民党支配の国政は存続することになったのです。

一九六〇年四月早稲田に入学してきた一年生の活動家の間から、ブントは国民的闘争を仕掛けて、時代に足跡を残したけれども、自分たちは一年生で事態を理解できなかった。あんなに盛り上がっている最中に指導者が消え、方針が分からずどうするか困り果てた。あれ以来、総括をどうするか考え続けすっきりしない気分だと訴える者たちはいまだにいるのです。そういう発言に対しては、その後東大派・革新派を形成して内部闘争に邁進した司会者たちがどう答えられるか判然としませんが、直後逮捕されて肝要とき場をはずされた私などには忸怩たる思いが残っているのです。リーダーが大方戦線逃亡してしまい、時局は物力を握る資本家たちが経済成長政策を掲げて、いわゆる五五年体制を固めて今日に至るのであります。

ブントが一つ寓話を残して消えてから間もなく五〇年の歳月がめぐりくる。日米安保改定の政治ドラマは多く語られているが、解体新書として解き明かされていない。新憲法の戦

後政治を戦後民主主義とよぶ呼称はあるが、この民主主義の裏張りとして日米安保条約はあったのだ。五〇年前の安保闘争を仕掛ける段階では、既成の左翼はもとより前衛的ブントの中にも日米安保条約の歴史を越えて両国を縛りつける怪力を解明できなかったものである。冷戦構造が崩壊して多極化時代が到来、日米政府間の秘密協定も明かされ、現実には即した安保条約の見直しはこれからであるという。安保条約を見失って、ブントは崩壊、左翼が党派闘争にのめり込んで、長い低迷の時代を迎えたのは、今になればその原因は明らかである。端的に表現するとすれば、現在の政権政党が安保条約の超現実的妖気に縛られて、普天間基地の移設などの沖繩の基地問題を処理できないのである。今また日米安保条約がこの国の内閣の運命を決めようとしているのである。社民党と連立している民主党の鳩山総理を一九六〇年の岸自民党総理と同性質の内閣と論じるつもりはないが、安保条約と日米関係の虜にされた総理大臣であることに差異はないのではなかるうか。日米安保条約とアジア政策の見直しを掲げて、この国の安全保障問題を担うことは、官僚依存の自民党が棚上げしてきた課題であり、ロールプレイの上手な鳩山さんの揺らぎの理論でも不可能なのではないだろうか。失われた安保五〇年のプロセスから何を学ぶか今こそ考える時です。以上安保闘争と現在についての私の問題提起を終わります。

佐藤浩一

蔵田●佐藤さんは、一九五五年、同志社大学経済学部入学。経済学部自治委員（以降四年間）。五六年、日本共産党入党。五七年、同志社細胞キャップ。五九年同志社ブント結成、日本共産党離党（ペンネーム花井正）。六二年関西ブント結成、議長（ペンネーム飛鳥浩次郎）。六四年、上京してブント再建に携わり、第二次ブント結成へ。佐藤浩一さん、関西ブントを中心にした活動についても述べていただくことにしています。

佐藤●今日は、関西でのブントの活動について何か発言してほしいということでした。関西のブントは、五九年の末頃に、同志社、京大、京都府立医大、大阪市大、奈良女子大などで次々に結成され、また大阪中電の前田裕昭さん（当時同志社の学生でもあった）も合流し労働戦線への広がりも見せました。関西でのブントへの取り組みは、実は緩やかで、遅かったのです。五九年の夏に京都府学連大会というのがあったんですけども、その段階では、京大の浅田隆次君が共産党との対決色をもった基調報告をしたのに対して、共産党京都府委員会から見逃せないから対案を提出しろとネジを巻かれて、対案を持って討論していたのです。ちょうどその頃、府委員会でもアルバイトをしていたということもあって、逃げられませんでした。それが一二月には、京大よりも先にブント

結成を公然化し、離党・除名ということになり、目まぐるしく動いたわけです。安保闘争に取り組むなかで、その都度、方針だとか闘争の評価をめぐって地区委員会や府委員会の学対部で議論をし、矛盾が深まり、対立が煮詰まってしまうのです。

その当時の府委員会の学対部は、大屋史郎さん（ペンネーム西京司、綱領論争でトロツキーの思想を取り入れた「沢村論文」を執筆、第四インター系）が府委員として担当し、委員には立命館から星宮煥生、さきほど名前が出た桜田健介、それに森、池上、京大から北小路敏、小川登、野口修、同志社から私とか、仲尾宏、浅川清だとかの人達が出て学生委員会というのをやっていたわけです。当時の状況においてはそれほど意図しなくてもおかしくなる配置でした。まだどうするかはつきりしない時、私などは星宮さんから、お前なんか権力を取ったら銃殺だと言っていて脅かされ、おっかなびっくりやっていたわけです。同志社に対する府委員会の締めつけはかなり甘くて、あまり力を入れて見るようには見えませんでした。京大には、神山茂夫だとか志賀義男だとか党中央から大物を送り込み、党批判グループを潰そうと、全力を挙げて取り組んでいた事情もありまして、結局同志社の方が先に、それもほんの少し残して、ほとんど全部がブントに移行しました。そして、ブント系は全学連に結集し、総力を挙げて安保闘争に取り組ましました。

結成されたブント関西地方委員会には、京大の今泉正臣、北小路、小川他、同志社から佐藤、浅川他、大阪市大から柳田権、武田信照、京都府立医大木村、それに大阪中電前田といったメンバーが集まり、会議を定期化し、組織を整えながら六〇年に臨みました。

ところで、共産党と決別して新しい左翼の旗を掲げたブント結成に遅れて参加した私などは、やっとトロツキーの『次は何か』を読んだ程度ですから、ブントの文献の読み込みにしても、あるいは次々に迫られる情勢分析や日本共産党との理論闘争にしても、自分たちでできる方法で取り組まざるをえなかった。東京での闘争への派遣、関西での独自の闘いに追われながらの作業でした。そして六月の闘いを経てのブントの総括会議と指導部の分裂。京大の指導メンバーはその渦中に飛び込み、やがて革共同へと転じました。しかし関西の現地グループは、分解した様々なグループの主張に応える程度で、ネットワークも良くなかった。その中身も良く分からない状態で、中央は混乱を極めているように見えました。私は、あれだけの闘争をやったのだから、ブントは、大勢力として、政治勢力として次の舞台に進むだろうし、それを希望するということを感じました。何とかならないのかという思いをもって独自に政治的な課題を設定し、運動を持続したという経過があったわけです。

こうした中で、京都での身近なメンバー、府学連グループ

の浅川、浅田、佐野茂樹、同志社の中島鎮夫、山本勝也君らに呼びかけ機関誌「烽火」を発刊し、グループ活動を始めた。そうした動きに京大の若手、渥美文夫、新開純也、清田佑一郎君らが呼応、取り組みをより組織的にすることを主張し、大阪、奈良、神戸を含めたブント関西地方委員会を再建、関西ブントの発足となりました。

関西ブントはそれなりの運動力を持続し、全国ブント再建の目標を掲げながら、六一年の全学連第一七回大会に臨むことになりました。大会に向けて京都府学連として準備したのは、六〇年安保闘争の総括を通して、新たな政治闘争の課題を明らかにすることでした。そのためにマルクスの「フランスの階級闘争」「フランスの内乱」や、レーニンの「マルクス主義の三つの源流」などの古典を手掛かりに政治理論を基軸に据えることを目指しました。全学連第一七回大会で忘れられないのは、「つるや連合」というグループができたこと、そしてこの大会の最中に、中村光男さん呼び出され、お茶の水の山の上ホテルに行ったところ島成郎さんがいて、情報を収集しながらいろいろと指示をうけたことです。そんなこともあってまだブントの再建があるのではないかという期待、意識を持ち続けた活動を関西はしていたわけです。

こうした運動への取り組みは、東京の方からもあるいは九州の方からも評価をいただいて、さまざま人が関西にやってきて、ブント再建に向けての取り組みの本格化への圧力や

機に直面するだけにその思いは切実です。

西村卓司

蔵田●一九三一年三月二四日生まれ。旧制高校二年で退学。三菱長船で下請け及び臨時工。その後、労組本部で専従として活動。下請け及び臨時工の当時、市内のパンを焼いて各店に配達というような仕事もやりながら、労組本部の専従として活動されます。六〇年一月、ブントへ個人加盟したことに對して、日共中央、県地区党による数々の弾圧があつて、西村さんと、全学連日共学生細胞からブントへ転籍した荒川さんとの二名が除名されました。それを受けて、六〇年一月末の細胞総会で、全員一致で離党を決定し、そのまま日共集団の細胞総会、ブント集団加盟でした。このような集団的な組織的離党、ブント集団加盟は、まさにブントがめざした建党組織論の輝ける象徴でした。革共同太田派の「加入戦術論」、革共同西派の「炭労支援・全学連ゼネスト論」、革共同黒田派の「サークル主義」「同心円的拡大路線」、総じて革共同からの「ブントの反帝実力闘争・戦術左翼批判」に對するアンチ・テーゼの結実でした。六〇年六月、新たに長崎造船社研を結成し、七〇年九月には、いわゆる第三組合を結成して、現在に息づく歴史と伝統に生き抜いた、現職の組合執行委員西村卓司さんを紹介します。

西村●なつかしいお顔も拝見するし、新しい若い方たちのお

要望が強まり、これは再建を待っていてもしょうがない、東京へ出掛けてなんとかしなければならんというので、「東京在住」を核としてブントの再建につなげていく活動を始めた。佐藤、中島、浦野、渥美、塩見らが東京に生活拠点を移し、再建グループとの交流を広げ、まず統一委員会という組織をつくり、マル戦派との統一によって第二次ブント結成にいたったわけです。そしてそれがやるとまとまったところで「分裂」が始まったんです。このことは今日のテーマからはずれるのでまたの機会ということですね。

こうしたことを振り返るなかで、つくづく思うことがあります。六〇年安保の時には三池闘争がありました。が、「エネルギー革命」推進を背景に、石炭産業そのものをなくしてしまふような攻撃が当時最強の労働組合に對して襲いかかりました。六八年の世界的な危機が生み出した社会運動の高揚、その一環としての全共闘の闘いの時には、国労が、やはり「運輸革命」ということで猛烈な攻撃を受けていて、学生運動プラスOBは、労働運動との連帯をもって「壁」を乗り越えようと闘ったわけですけど、なかなか思うようにいきませんでした。このあたりはもう少し突っ込んで、どうしてダメだったのかという総括を深める必要があると思います。その根っこには、本当に一人一人が自立したところに成り立つコミュニティの弱さがあり、すべてを相対化し理論の再構築をはかることが問われていると思います。出口の見えない危

顔も拝見して、大変うれしく思います。長崎ですので、時々しか来れないものですから、なにをどう喋ったらいのかという事を飛行機の中でだいぶ考えました。

結局、なぜ離党したのかということも離党した後はどうしたのかということも喋らなくてはならず、その長い歳月の歴史を一分、一分で喋るのは難しいと正直実感しております。六〇年に離党する前は、レッドパージ後に、一人もいなくなった共産党に代わって、新しく党細胞を建設したのは、私一人だけでした。

五〇年の朝鮮戦争の時に、レッドパージが、一〇月には長崎で行われまして、九〇数名の仲間の首が切られます。この年、朝鮮戦争に行つて、銃火を交え、被弾した船が、やはり長崎の三菱のドックに修理に入ります。当然のことですけれども、その段階で、組合指導部が被弾した船をストライキの対象に入れるわけです。

ところが、これに對して反撃したのがGHQです。忘れもしません。福岡の軍政局から、リスマン、モップルという二人の人物がやってきて、闘争委員会、平時で言う執行委員会ですが、その場に乗り込んできました。そして、ただちに被弾した船をストライキから解除せよと言うのです。解除を拒否したらどうするのかという闘争委員の質問に對して、ただちに沖繩行きである、沖繩に行けば重労働が待っている、と脅しました。本当なのは大変疑問だと思いますが、当時、

そんな喉嚨を執行委員会の席上で聞きました。それでも、共產党の諸君は、次の受注期間でも首切りに反対しました。しかし、民同と言われる人たちはこそぞって、この軍の要請に応えるかたちで首切りを認めました。

そして、結果は九二名の首切りとレッドパージが、公然と一〇月には行われました。

私は、東京の旧制高校時代は、むしろ右に属していて、自治会の掲示板なんてのは、ひっぱがして歩いていました。しかし、そういう人間が長崎で変わりました。朝鮮戦争における組合の闘争姿勢が、政治局なんかによって、妨害され、恫喝され、最後には、レッドパージで九二名の仲間が首を切られたのを見たからです。

組合は、九二名の仲間に対して一万二千人いましたから、百円ずつでもいぶん大きいお金になるわけで、組合員に百円ずつのカンパを提案しました。ところが、今まで、共產党の幹部を断固支持してきた組合員が、あつという間に方針転換し、一緒に首を切られたらかなわんという気持ちで職場を閉ざしました。そして、全員投票の結果は否決です。この時の執行部はもはや民同ですが、彼らが逆に「組合の財政から五〇円出しますから、組合員の皆さんは五〇円で結構です、是非カンパをしてください」と言いました。それで、一〇〇円じゃなくて、五〇円だったらカンパに応じようという一般投票がかるうじて過半数で成立しました。

私自身が組合本部で聞いたのですが、長船分会の闘争委員会が、東京にある本部と相談し、ともかく分会の指導部でことを納めるわけにはいかなかったから、なんとか中央あたりからストライキの中止命令を出してくれというふうに懇願をして、ようやく中央闘争委員会が、ストライキの中止命令を行います。それを武器に長船の闘争委員会は、職場に対する鎮圧に入ります。こうして、最後は、エイゴンに対するスト権が封殺され、結局は潰されていきました。そして追い打ちをかけるようにしてレッドパージが進むということになったわけです。

そういう経験を直接見ていると、これはいくらなんでも民同とか社会党に尾っぽをふってついでに行くというわけにはいかない、旧制高校時代には自治会の掲示板を剥いで廻った私ですが、いくらなんでもこれには追従するわけにはいかないというところで、共產党に入党することを決めました。

入った時、慶応大学を卒業した名前も顔も知らない人が一人いました。私で二人目です。そういう現実の中で、共產党の再建が始まります。そして、やがてその共產党が、二桁、さらに三〇名ぐらいに増えた段階で、初めて、田川和夫さんの『日本共産党史』に、東大から長船に移行した西村の指導によってという一言余計な説明がつくわけです。おかげで、その後、全国を回って、私は、違うところで、あの本は嘘だからと、私は東大なんか出ておりませんと、中学で退

結果として、組合の財政から五〇円、組合員から五〇円、合計一〇〇円が、まとめて九二名の仲間たちに配布されたのです。

やがて、五七年、五八年、五九年、長崎造船所では、核装備が可能であるといわれているエイゴンの生産拒否闘争に立ち上がりまます。スト権がわずか五〇数%というぎりぎりの範囲内でしたけれども、ようやく確立して、会社との団体交渉に入るわけです。

しかし会社の反撃はすさまじいものでした。私自身が初めて体験した、というより、執行委員会を含めて、たぶん全組合員が初めて体験したと思うんですが、会社のピラや壁新聞や所長放送を通した、全力をあげての従業員に対する切り崩しです。要するに、防衛庁の船や軍用船の潜水艦とかを作っていましたから、これを拒否したら、その発注が止まってしまうということですよ。会社によれば、合理的なもので、今の段階で発注が止まれば、どここの工場が何百名、どここの工場が何名と、人数まで各工場に関係するところを発表して、これだけの人間が首を切らざるをえなくなったという壁新聞を随所に張り、それでも聞かなければ、所長放送がありまして、構内マイクで所長が放送するわけです。

私は原爆に遭っています。家族を亡くした自分自身も被爆者で、被爆者番号を職場に吹きまくりました。この攻撃には、さすがの職場も大動揺というのが現実でした。この時、

学した方ですというふうに述べて、一苦勞したことを思い出します。

長崎は被爆地ですから、長崎県議会は、長崎造船の組合が決めたエイゴン拒否の方針を一度は絶対多数で可決しました。ところが、それに対して、私たちに言わせれば、たかだか長崎造船所の総務課長が、議会に申し入れただけで、あつという間にひっくり変えられます。一事不再決という話はもう通用しないわけです。県議会では、社会党の人たちだけが孤立して、一事不再決どころか、翌日、採決、再採決が行われて、県議会の決議もひっくり返されました。これから、私たちの反省が始まります。そして、共產党だけではこれほどにもならんということから、長崎造船における核装備可能なエイゴン生産拒否、それから臨時工の常用切り替え闘争、いずれもストライキを構えて、闘争態勢をひいて闘いました。エイゴン拒否の闘争は、中央の了解を得ていないにもかかわらず、現実には会社側にあつという間に屈した中央からのストライキ中止命令によって、長船の分会は、見事に、中間の要請を受け入れてストライキは放棄されました。そこが労働組合の弱いところです。

中央からの要請にもかかわらず、さすがに、この臨時工の常用切り替え闘争だけは、曲げるわけにはいかないと言って、長船は、臨時工の常用切り替えのために、本工がストライキ権を確立しました。これが、五九年だったと思います。

そして、ストライキを打ち、二〇〇〇名近い臨時工を常用に切り替えました。しかし、二〇〇四名の臨時工の中で、不適合者、つまり欠勤の多い臨時工の人たちは、常用するには値しないということで、三三名が首を切られました。この時もうすでに、私たちは共産党との決別を決めていましたので、長船細胞の名前で、ストライキの確立を呼びかけるといふ公然とした活動に踏みきりました。一応、三三名の不適合攻撃は跳ね返したのですが、次の段階に、その人たちが狙われました。つまり、会社側は三三名を保留して、他の人たちを常用に全員切り替えるという巧妙な手段に出て、これによって、本工が切り崩されていきます。つまり、結論として、三三名を見捨てたわけです。私たちは、その頃、すでに、共産党路線からの決別を心に期するところがありましたから、組合に対するピラでは、公然としたストライキの貫徹を呼びかけるようになっていました。その段階でも、長崎地区委員会、県委員会は、私たちの気持ちを理解して、カッコ付きですけど、まだまだ擁護して、いてくれました。しかし、開けて、六〇年の一・一六羽田闘争に、長船細胞ももちろんのこと、長崎県の平和委員会も満場一致で羽田闘争に細胞の労働者を送ることに決めました。そこまでは、まだよかったです。というのは、長崎県委員会の党の県委員長も、長船細胞の会議に出席して、それはけっこうなことだ、行って来いよ、と同意しただけではなくて、長崎駅まで出て

きて、われわれと握手をし、出発する二人の仲間とも握手をして、送り出したんです。その後が、まづかったです。たちまち私が査問にまづ呼び出されました。その頃はまだ、ともかく除名されるまでは、まじめな共産党員でいようと自分では思っていましたから、共産党が決める大衆と接してはならないという決定を律儀に守って、年を越すわけですけれども、一・一六闘争に参加した二人のうちの一人は党員だったわけですが、さすがに、その党員にも査問会議の招集がかかるという段階に及んで、全員がともかく離党せざるをえないという結論が、急遽、長船細胞で決定されます。これも県委員長・地区委員長が同席の上の話です。私は、隔離されていますから、襖の外で、その成り行きを聞いてました。それが潰されて、ことが始まりました。ここまでしゃべるのが精一杯です。後は、長船で共産党に代わる運動を作ろうということとで、長崎社研が生まれ、やがて第三組合が三七年という歴史に入るの、それ以降ということになります。現状はその状態が保たれているということをご報告して、とりあえずのご報告とさせていただきます。

前田裕晤

蔵田●前田さんは、一九三四年生、一九五〇年、レッドパージの後補充として大阪中電に通信士として配属。夜勤専門。一九五三年同志社大学入学、大学院在学中の一九五九年ブ

ト加盟。一九六一年日共除名。六二年より全電通大阪電信支部執行委員。電通労研結成、一九七七年、大阪集会の発議で「労働情報」再刊に参加、現在その代表。労働戦線右翼再編・総評解体に反対し、労研センター市川誠事務所より常任幹事になる。一九八五年、電電公社の民営化に反対し大阪電通合同労組結成。一九八七年、全労協結成に大阪全労協より参加。現在、副議長として活躍中です。

前田●前田裕晤です。先ほど西村さんも述べておられました。私もレッドパージの後補充として職場に入ります。二・一ストの後の高揚期が終わり、職場は反動化している中に放り込まれた世代なのです。私は最後の旧制中学の入学生でしたが学制が変わり、女学校と合併し新制高校生になりました。しかし二年で休学し京都電気通信学園(旧通信講習会)に入り、モリス通信を習います。約一三〇名の通信生の内、三分の二は戦争の絡みで父親がいない世代で、農家の次男、三男坊で貧しくて食えないし、進学も出来ない連中で無料給費性学校の通信学園に集まったのです。技術訓練だけではなく普通科もあり、寮で三食付き、僅かの手当ても支給されました。ただし、卒業後二年間は辞めることはできない条件がありました。同じような仕組みは、鉄道講習所や水産講習所もあり、衣服まで含めての完全給費生学校は戦前の軍隊がそうです。貧乏人の子弟が集中するのも当たり前です。私たちはレッドパージの後補充として、繰上げ卒業され大

阪中央電報局に配属されます。前日の一〇月三〇日に最後のレッドパージで放り出される光景がありました。雨が降っていましたが、裸足の女性と、作業服の三人の男性が通用門から放り出され、「中へ入れてくれ、門を開ける」と言っても入れないのです。これが最後のレッドパージだったそうです。翌日から出勤するのですが、職場の雰囲気は違います。全く官僚的で、管理者からは「新米」と怒鳴られっぱなしで、活動家は追放され重苦しい日常が続くのですが、戦後の民主化教育を受けた新米が集まり、抵抗運動が始まります。私は豊中市の刀根山にある独身寮に入りますが、寮にはレッドパージで首切られた寮生がおり食べ物のカンパを迫られたりしました。職場に行けば、労務加配米があり飯盒で炊いて食べられるのですが、パージされた人達には何もありません。そんな生活が続いていたのです。

元庄屋の屋敷が寮だったのですが、「新米、お前は少しものになりそうや、見せたるわ」と言われ奥の部屋の畳をあげると、そこに手作りの地下室があり、そこには当時共産党が非合法で発行していた「平和と独立」の秘密の印刷設備(騰写版)と、横の棚には火炎瓶が並び、栓を詰めれば使えるものが揃っていました。私はオルグされていた訳です。朝鮮戦争が始まり大阪中央電報局の屋上にはGHQつまり占領軍の軍事無線局が置かれていました。当時、突然、寮の離れ部屋に呼ばれました。五、六人がいましたがその内の一人以外

はレバを受けた人達で、オルグに来た人は、突然、「やるのか、やらないのか」と軍隊のゴボウ剣を畳に突き立てて、行動を迫りました。その行動目的は屋上の占領軍の軍事無線所の爆破、炎上だったので。

屋上は占領軍以外入れないよう柵をし、用心のため犬を四、五匹放飼にしてあり、さらに電源を独自に一階から引いていました。

まず、毒肉団子を犬に食わせ、眠らせた上でガソリンを撒き、火炎瓶を投げる計画でした。私には白い粉が入った封筒が渡されました。それを送電線にかけ、線を切断するのが私の役割でした。電報局は二四時間勤務です、私は夜勤専門（午後四時から一〇時）でしたので呼ばれたのでしよう。結論から言いますと、電線は切れませんし、肝心の屋上では、犬は団子を食わず、その後の火炎瓶攻撃は出来ずじまいで、闘争は終わりました。

寮は豊中にあり、私は香里園にある高校に通学していたため、レバの人から洪紙に紐で括られた包を、香里園の駅前まで運び、阪大の学生に渡すように頼まれました。翌朝、香里園駅前で、大学生に渡しました。五月の末だったと思います。夜勤を終え寮に帰ると、皆が待ち構えていました。「無事に帰ってきて、よかった、よかった」と言うので「なんですか」と尋ねると、「じつはあれは爆弾なんだ」と言うんです。六月になった段階で、香里園に隣接する旧陸軍の枚方工

廠で、小松製作所が朝鮮戦争で故障した戦車の修理をしていたらしく、それに爆弾を仕掛けたのです。爆発しガラスは割れましたが、肝心の工具には被害を与えられませんでした。その直後に吹田事件が起きます。私たちの寮は山の上であり、下には阪大の石橋分校がありました。そこで、反戦前夜祭が開かれました。朝鮮青年組織「民戦」と学生と労働者の二五〇〇名くらいが集まり、夜中にグラウンドで火を焚き、太鼓を叩いたのです。暗闇での炎と太鼓。これは人間の本能を掻き起こすかのようで興奮しました。寮生もグラウンドに向かうのですが、その時は軍用だった伊丹飛行場を襲撃するとの噂が飛び、一部は、終電が終わっていた阪急電車をタダで動かし、いわゆる人民電車ですが、曾根駅下車で、飛行場ではなく吹田操車場に山越えで向かったのです。私たち北攝の高校生組織は、途中で解散します。これが吹田事件の直前の出来事でした。他にもありましたが、共産党の武装闘争時代を幾つか経験することになったのです。

昼は同志社に通学し、夜は中電で職場活動をする、レバで黨員はおらず、もっとも二人だけが生き延びていたのですが、何もしない、若手が勝手に行動する内に、それが党細胞となっていくのです。非民主化な職場で民主化闘争から始まり、若手をオルグし、活動家になれば一日一回はなんでもいいから課長と大きな声で怒鳴り合いをするのをノルマとし、夜出勤してから点検する、今から思えばかなり官僚的

生意気だったと思いますが、しかし皆に自信がついたのも事実です。大学では文学部で佐藤浩一は二級下でしたが、他学部でしたので接触はありませんでした。私は大学でも勝手にオルグを始め、活動家組織「木曜会」を作り、社会科学の委員長をやっていました。私は拠点細胞に居るとの理由で、山村工作隊に回されることはありませんでした。

職場は通信省から二省分割で、電気通信省と郵政省に別れ、一九五三年には国際通信部門が国際電電として民営化され、私どもは電電公社になります。公社には千代田丸という海底電信敷設船があり、GHQの要請で韓国との間に電信線の敷設作業にかかるのですが、当然のことながら韓国の李承晩ラインを超えた途端に、韓国軍の砲撃を受ける事件が起きました。所属する関東地方の本社支部は千代田丸分會に帰港命令を出し、当局の出航命令にストライキを指令の拠点支部で、委員長、書記長は共産党系と言われ、全電通本部とは対立関係にあり、本部は簡単に解雇を認めます。これがいわゆる千代田丸事件です。

民同派の支部は本部の解雇容認方針を認め、これに全国からの解雇反対の声が上がりますが、おかしなことに関西の共産党は「今重要なのは社共の統一戦線だ」として、解雇方針を党の細胞に認めさせようとしたのです。ところが大阪中電の職場の中では、代議員の三分の二は我々の組織する黨員が占めていました。党の上から降りてくる方針は、中央本部の

解雇方針を認めると言うのですが、私たちはそれに断固反対でした、結論からいうと、職場ごとに反対決議をとり、支部委員会で支部民同派の提案を否決したのです。私は党決定違反として第一次査問を受けることになりましたが処分にはなりませんでした。

警職法反対闘争でも、スト拠点になったにも拘わらず、山岸章（後の連合初代会長）支部長が拠点返上を支部委員会に提案するのですが、これも否決し、支部執行委員全員が労務課に入るのを目撃し、支部委員有志で臨時執行部を作りストに備えたのですが、暁の中止指令で不発に終わります。しかしこの時も査問を受けることになり、北大阪地区委員会と大喧嘩になります。最近の傾向に疑問を持った私は、同志社でオルグした連中に相談すると、全学連内部でもおかしな気配があることを知りました。五九年の暮れに同志社の後輩が東大の古賀康正君を大阪に連れてきて初めてプントのオルグを受けることになりました。京都では学生から出発したものの労働者はいない。そこで院生で夜は働いているのがあることと、私にオルグをかけたようです。古賀君とは理論的な討論をした記憶はなく、党の改革とむしろ彼の情熱に圧倒された思いがあります。

六〇年一月一六日の岸渡米阻止羽田闘争には大阪代表团に大阪中電青年行動隊として参加しましたが、党の参加中止指令を拒否し、羽田に向かい全学連部隊と合流しました。しか

